

究極の品格とラグジュアリーを求めて

ESQUIRE

JAPAN

SPRING/SUMMER 2018
MEN'S CLUB 5月号増刊

UPGRADE

ビスポーク、スーツ、旅、カーライフetc.
人生を格上げする智慧

The

Big Black Book

cover
Roberto Bolle

The Style Manual for Successful Men

01

インカラ・マチュピチュ Pueblo ホテル

Inkaterra Machu Picchu Pueblo Hotel

世界遺産の近く、密林に埋もれるようなホテル

マチュピチュ村に拠点を構え、サステナビリティな自然環境保護、地域社会への貢献と保全に寄与し、圧倒的なスケールのネイチャー感を堪能できる、旅巧者もうならせる宿がここにある。

Text / Naoko Terada / Composition / Gotaro Hosomura / Illustration / Yoshimi Nakori / Edit / Kazumoto Kainuma



ペルーを代表する世界遺産マチュピチュ。1911年、米国人探検家ハイラム・ピンガムによって世紀の発見がなれ、世界遺産に登録された現在、遠く見学はガイド同行が義務付けられているほか一日の入場制限もある。Inkaterra

01シダやランなど肥沃な地の植生がみごとに「インカテラ・マチュピチュ・プエブロホテル」の広大な敷地。夜もまた雰圍気がある。02_カシータの室内。タイプによって暖炉が備わる。アメニティもエコ仕様とこだわりが。03_レストランに隣接したラウンジ。ウェルカムドリンクにはヘルシーな物ビスコサワーが登場する。©Inkatorra



セレンディピティがもたらした 至高のサスティナブルハイダウェイへ

旅をしていると幸福な偶然に出会うことがある。世界遺産マチュピチュを訪れたときに滞在した「インカテラ・マチュピチュ・プエブロ・ホテル」がまさにそうだった。「一生に一度は見たい絶景」マチュピチュ。15世紀ごろ、繁栄した古代インカ帝国の遺跡は誰をも感動させる存在。標高2000メートル超えの山肌に造られた空中都市は今もなお、孤高の姿で当時の栄華を語り、世界中のツーリストを魅了する。それだけ人気が高いため、遺跡入場から優秀なガイドの確保、ホテルなど早めに旅の日程をフィックスすることが望ましい。かくいう筆者も半年前には予約をすべて済ませていた。ところが、あっけなく予定を変更してしまった。それもペルーに入国さえしていない時点で、だ。

ペルーへは米国経由で飛んだ。トランジットはマイアミ。眠つぶしに雑誌を購入した。その一冊に紹介されていたのがここだった。密林に埋もれるようなホテルの写真を見た瞬間、心をゆさぶられた。「泊まりたい」と思った。ネットをたぐり、オンライン検索するとマチュピチュ滞在中に1泊だけ客室が空いている日がある。しかも残り1部屋だけ。迷いはなかった。すでに予約をしていたホテルにキャンセルとキャンセル料金を支払うメールを送り、「インカテラ・マチュピチュ・プエブロ・ホテル」最後のひと部屋を手に入れた。

遺跡へのゲートウェイとなるのはマチュピチュ村だ。ホテルもここにある。村の正式名称は「アグアス・カリエンテス」。スペイン語で「熱い水」。そう、この村には温泉が湧いているのだ。山あいの村の風情も日本の温泉郷のようで日本人にはどこか懐かしい気持ちにさせるものがある。ホテルは村のはずれにある。といっても駅から歩いてわずか10分足らず。ゲートを抜けて敷地内に入ったらそこに

は熱帯の森が広がっていた。小川が流れ、肥沃な土地に育った緑の木々をハチドリが飛びかい、頭上では野鳥が鳴いている。11エーカーという広大な敷地はまさに野生のサンクチュアリだった。

「インカテラ・マチュピチュ・プエブロ・ホテル」は1975年に創業されたインカテラグループのホテルのひとつで、1991年に開業。同グループのコンセプトは徹底した持続可能な自然環境保護、そしてペルー文化の原点である山岳・農村エリアの付加価値を高めた地域社会への貢献と保全にある。

敷地内に点在するカシータと呼ばれるロッジタイプの客室は83。伝統的な家屋をイメージし、材木、日干しレンガ、タイルなど可能な限り地元産の素材を使用。室内は心地よさと適度なラグジュアリーさ



04_料金には朝食と夕食が含まれる。ディナーは地元産の食材を使ったモダンペルー料理。ワイと呼ばれるげっ歯類やアルパカなど伝統メニューも。05_クスコからの鉄道脇にあるのは「カフェ・インカテラ」。列車を待つのに最適。06_熱帯の緑に囲まれたカシータは2階建て。スイートルームにはテラスのあるタイプも。©Inkatorra



Naoko Terada
寺田直子_トラベルジャーナリスト

旅歴30年。訪問国は90カ国ほど。女性誌、旅行サイト、新聞、週刊誌などで紀行文、旅情報などを執筆。独自の視点とトレンドを考えた斬新な切り口が定評。日本の観光活性化にも尽力。青森県の観光戦略アドバイザーなどを務める。



を備え、上質なベッドリネンの上にはアルパカのラグ。窓の外には生い茂るジャングルのような庭園を眺めること



01 ユニークなドーム型のアンデス式サウナ。セッションは45分。最大4人まで入ることができる。プライベートな貸し切りも可能。
02 天然石を熱した上にユーカリの葉を置き蒸し上げる。アップダウンの激しいマチュピチュ遺跡散策のあとの筋肉疲労&リフレッシュにお薦め。人気が高いので予約は早めに。©Inkaterra

なんと贅沢な時間だろうか。
敷地内にはユニークなスポットがある。それがドーム型のアンデス式サウナ。川の石を温め、そこにフレッシュなユーカリを投げ入れサウナ状態にする。じっくりと湿度が高まった空間とユーカリの清涼感の波状効果は想像以上。ヒーリング効果と



併せスピリチュアルさをも体感させる。すぐ横には天然の温泉が湧くブランジプール。蒸し上げられた体で飛び込めば圧倒的な爽快感が全身を突き抜ける。ペルーの名産ココアの葉を使ったボディトリートメントも人気が高い。抽出したオイル、クリーム、フレッシュな葉そのものを使いボディ前身をスクラブ&ポリッシュ。地元ではお茶にして飲用されるココア。高山病にも効くということでココア茶は旅のあいだよく飲んだが、スパのメニューというのは希有だ。

マチュピチュ登山からバーディングまで ナチュラルリストを魅了するエクスカーション

このホテルの特徴にゲストのためのアクティビティ&エクスカーションの豊富さがある(一部有料)。敷地内には専任のガイドが常駐するエコセンターがあり、本格的なマチュピチュ登山から1時間程度のネイチャーウォークまでゲストのリクエストや相談に応える。また、動植物や野生動物の生態系のリサーチもここで行っている。

実はこのホテルは「ナショナルジオグラフィック」誌が認定する「ユニーク・ロッジ・オブ・ザ・ワー

広大な敷地すべてがゲストのためのフィールド。プライベートなキャンドルディナーからフェニクシアナワイン会など。標高2000メートル級の深谷に囲まれたロケーションは唯一無二。遺跡以外のマチュピチュでの楽しみ方を教えてくれる。©Inkaterra



「鳥」のひとつ。そのためか、自然を愛するナチュラルリスト、バーダー、ネイチャーフォト愛好家などのゲストが多い。ガイドも彼らを満足させるだけのスキルをもっているところがすばらしい。

敷地内には約5キロのネイチャートレイルが整備されている。40年以上かけて築いたランクチュアリには372種類のラン、200以上の鳥類、100以上の蝶などの固有種が生息している。早朝、バードウォッチングツアーに参加した。同行者はカナダから来た野鳥愛好家の夫婦。自前の双眼鏡に長い望遠レンズを装着したニコンで装備。鳥を求めて世界中を旅している筋金入りのバーダーカップルだ。

ほどよく整備されたトレイルをゆっくり歩きながら頭上を見渡す。筆者は早朝散歩と割り切って足元に咲くランや色鮮やかな花々を愛でる。敷地内は想像以上に広く、深かった。背後にそびえるマチュピチュのダイナミックな渓谷を眺めていると、「あそこ！」とガイドが指で示す。そこにはペルーの国鳥といわれるアンデスイワドリ姿が。それもオレンジ色が鮮やかなオスだ。バーダーカップルは夢



02



01

01 敷地にはオーガニックな茶畑がありオリジナルの紅茶を栽培。毎日ティーサービスがおこなわれるほかガイドツアーも(無料)。スパでは茶葉を使ったトリートメントも用意する。02 エコセンターのガイド同行のエクスカッションは17タイプ。ネイチャーウォークなど敷地の自然を生かした無料ツアーも多く用意されている。©Inkaterra

インカテラ・マチュピチュ・プエブロ・ホテル

Railroad Km 110, Aguas Calientes, Machu Picchu, Peru
+51 1 610 0400

宿泊料金には朝食、アラカルトディナー、マチュピチュ駅からの送迎、無料のガイドツアーなどが含まれる。料金はシーズンによって異なるが2人一部屋使用で1泊600米ドル前後へ。12月24日と31日のみスペシャルディナーとなり追加で1人85米ドルが加算される。パッケージはマチュピチュ遺跡への専任ガイド付きツアーなどを含めた2泊3日コース1947米ドルへ、さらにスパトリートメントなどを加えた3泊4日コース1896米ドルへなどがある。

中で連写している。「とてもシャイな鳥なので今日はラッキーでしたね」。ガイドが言う。予期せず泊まることになったホテルでのかけがえのない時間。ほんのわずかな好奇心で旅はがぜん、面白くなってくる。

「セレンディピティ＝幸福な偶然」。それをつかみ取るのは自分次第。先が見えないからこそ冒険心が湧く。非日常が見せる一生に一度の体験。これだから旅はやめられない。

高層のバードウォッチングツアーでは高層の望遠鏡や鳥類図鑑の貸し出しも。ガイドは鳥類を見分けるガイドのスキルが求められる。左:水飲み場に現れたハチドリ。右:水飲み場では18種類のハチドリを確認して見逃さなければ国鳥と言われるアンデスイワドリが現れるかもしれない。まさに鳥好きの楽園だ。©Inkaterra

